

A: このあと二人何があるん？

B: え？

A: Where are you guys going?

B: あたしなあ、生徒会。だから Thursday I'm gonna go to practice やから。

A: No, but why won't you come around? 何時まであるん？

B: うーん、けっこうする。だってなあ、I wanna go to practice on Thursday, but I mean I can't miss 生徒会 for two days, right?

.....

これは、学校での生徒たちの日常的な会話の一部ですが、このような英語と日本語（ここではしかも大阪弁）を混ぜた会話は、アメリカ在住の日本人の子供たちの間でもよく聞かれることでしょう。二つの言葉を混ぜるなんて心配だ、と思われることもあるかもしれません。

チャプター3では、このようなバイリンガル同士（できるだけ自分を含む）の特徴ある会話を録音してそれを分析した小論文を書くのが課題です。

そこでわかることは、これらは単に言葉を『混同』しているのではなく、そこには文法的に説明できるメカニズムもあり、本人には無意識であっても必ず何らかの『目的』があってスイッチが行われている、ということです。これは一般にコードスイッチと呼ばれるもので、この会話をしている人たちは、もちろん日本語のみ・英語のみの会話をすべきときにはそれができる人たちですが、同じバイリンガルである人同士の会話になると、自分の中にバランスよく共存する二つの言語のうちよりよく自分を表現できる方を細かい場面で選択し続けていることがわかります。本人にとっては無意識で自然に行っていることでもそれぞれのスイッチポイントに『目的』があることもわかります。

ある生徒はコードスイッチをこのように表現しました。

“.....It is actually hard not to code-switch. It is like drawing a tulip with a green crayon in your right hand when you have red in your left. (コードスイッチをしないで話すのはつらいです。まるで左手に赤のクレヨンがあるのに右手に持った緑のクレヨンでチューリップの花の絵を描いているみたいな気分)”

日本語のみ・英語のみで話すべきときにはきちんとそうできるようにしていこう、と意識を強めつつ、バイリンガルである自分を楽しみ、より好きになれる。それがこの課題のねらいです。

SIS の多種多様な選択授業の中には、この授業のように、これまでの自分の経験をふりかえることや、それを応用すること、意見を交わしあい、議論しあい、帰国生としての自分をより深く理解する機会にあふれた授業がたくさん用意されています。皆さんとも授業でお会いできる日があるとうれしいです。

最後に・・・極めて私的な思いですが、Bilingualism は、私にとってはサンディエゴ在住時に通った大学院での修士論文テーマ。実は、このような授業を日本で、英語を使って、高校生向けに担当させてもらえる場所があると知り SIS の教員として働くことを希望するようになった、といっても過言ではないのです。一年に一学期だけ開講の授業ですが毎年この授業での生徒たちとの関わりから得られるものは私にとって貴重な財産です。皆さんもどうかアメリカにいる今の時間を大切に、Bilingualism を楽しんでください。

井藤 眞由美

いとう まゆみ

アドミッション / 英語科

1959 年大阪生まれ。大阪市立大学文学部卒。大阪府立高校に 10 年間勤務の後、1993-1998 年、アメリカでシカゴとサンディエゴに在住。サンディエゴでは応用言語学を専攻し修士号 (M.A.) を取得。3 人の子どもの子育てを通して、現地保育園、幼稚園、小学校、そして土曜日補習校を経験する。2000 年より千里国際学園中等部・高等部に勤務。



千里国際学園 中等部・高等部
〒652-0032 大阪府箕面市小野原西 4-4-16
電話 072-727-5070, FAX 072-727-5055
www.senri.ed.jp
admissions@senri.ed.jp

編集長から一言

北米に住んでいる日本人の子どもは、英語と日本語の二つの言語を学んでいます。特に現地校に通う子どもは、言葉だけでなく、英語で様々な教科の勉強をしています。学習内容をしっかり理解するためには、第二言語である英語の高いレベルでの習得が欠かせません。

また、保護者は子どもに夢を託して、「わが子をバイリンガルに」と、家庭や補習校で日本語の習得と日本語による教科学習を強めています。二言語習得の重荷を背負わされた子ども達は、強いストレスを感じながら、体で言語を、必死で身に付けています。

ここで紹介のあった井藤先生のクラスを見学させていただきました。海外生活体験のある生徒自身が、自分の二言語習得の経験を振り返りながら、言語の習得プロセスとその意義、さらにはその体験の中で受けた教育やトレーニングを振り返ることは、自分自身の理解にも繋がるものだと思えます。高校生でこんな素晴らしいクラスが受けられることを、うらやましく思いました。井藤先生、ご紹介ありがとうございました。